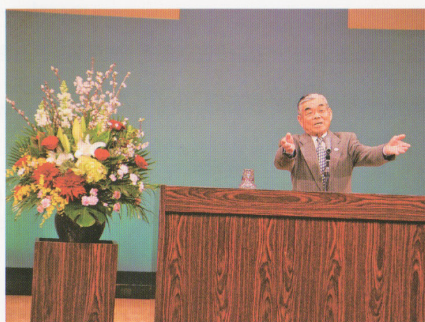


第22回石井十次顕彰のつどいの様子

第22回石井十次顕彰のつどいは、高鍋ラグビースクール校長の黒岩 正春先生をお迎えして記念講演をしていただきました。高鍋西小学校の児童の研究発表や劇も素晴らしい内容で好評を得て盛会に終わることができました。



石井十次顕彰のつどいにて小澤町長のあいさつ



高鍋ラグビースクール校長、黒岩正春先生の記念講演



西小学校6年生による児童劇「縄の帯」

多額のご寄付をいただき ありがとうございます。
厚くお礼申し上げます。

寄付者報告第22号

● 24. 7. 1 ~ 25. 6. 30

篤志寄付

高鍋町 株式会社 増田工務店
宮崎市 印刷センタークロダ
高鍋町 SSグループ
高鍋町 事務機のフクモト
米沢市 種村 信次
高鍋町 株式会社 高鍋衛生公社

忌明寄付

高鍋町 萱嶋 稔
高鍋町 福本 幸良
高鍋町 矢野 正義
高鍋町 坂本 茂
宮崎市 藤井 慶一
高鍋町 皆川 絹代

(敬称略)

あとがき

『顕彰会だより』第22号をお届けいたします。今年は特に暑さが厳しいようです。健康管理に気をつけてください。顕彰会事務局も4月より青木和徳事務局長に代わりました。今後とも町民の皆様方の今までより以上のご協力をお願い申し上げます。

財団法人 石井十次顕彰会

〒884-0006
宮崎県児湯郡高鍋町大字上江8113番地
TEL. 0983-23-4312

石井十次顕彰会だより

第22号



高鍋町中央公園内に建つ「石井十次像」

1200人余りの孤児で一杯の岡山孤児院(明治39年・西暦1906年)

財団法人 石井十次顕彰会

「第22回石井十次賞」受賞者紹介

「第22回石井十次賞」候補者募集を、平成24年12月末を期限として全国都道府県、政令指定都市の社会福祉協議会及び個人推薦人にお願ひしました。推薦していただいたその候補者のうちから、平成25年2月20日、東京都において選考委員会を開催し、審査の結果下記の先生に決定いたしました。



社会福祉法人 嬉泉

常務理事 石井 哲夫

住所 神奈川県川崎市宮前区大蔵1-22-32
TEL (044)977-1519

【受賞者の紹介】

石井 哲夫先生は、1927年生、東京都の出身で1950年東京大学文学部哲学科（心理学専攻）を卒業され、同大学大学院を経て1955年日本社会事業短期大学の専任講師からスタートされ、助教授・教授と昇任同大学の社会福祉学部（4年制）の開学及び大学院の開院にも貢献されている。定年を迎え、1995年に同大学の名誉教授となられ、同年に小平市にある白梅学園短期大学の学長に就任されている。さらに、2004年、それまでの教育が評価され、同大学の名誉学長の称号を得られる。その後、目白大学の学術顧問、日本臨床心理学会、日本保健福祉学会、日本家族心理学会、日本福祉心理学会の理事・評議員等の役職も歴任し貢献されている。

以上のほか、数多くの役職を持たれる中で、特筆すべき役職の一つに2001年から社団法人日本自閉症協会の会長として2011年まで活躍され、現在は顧問として後進の助言・指導に当たっておられる。このほか恩賜財団母子愛育会愛育研究所愛育相談所長、をはじめ東京都発達障害者支援体制整備推進委員会や地区の指針協議会の会長として自閉症児に関する支援体制の確立に多大の貢献をなされている。

現在社会福祉法人嬉泉の常務理事として、発達障害児・自閉症児を救済するための支援する組織として設立、発足当時から今日まで指導しながら活躍をされている。

社会福祉関係の分野で長年にわたる積極的な活動や数多くの国政レベルの役職を歴任しておられ学識経験者、これに加えて実践者として現在もお活躍しておられる。

また、石井十次賞の選考委員としても石井十次顕彰会の活動支援に多大の助言指導をいただいている。



わたしにできること、みんなでできること

高鍋東小学校 5年 三浦 菜花

私は、4年生のめいりんの時間に、石井十次先生の事を学習しました。十次先生は、1200人もの孤児を救い、孤児救済に一生をささげた人です。そんな十次先生から私は、2つのことを学びました。

1つ目は、「大勢の人を救うためには、助けが必要だ。」という事です。

1200人もの孤児を救うには、孤児院の建設や食事の費用など、たくさんのお金が必要です。それは1人ではおぼつかしい事だと思います。妻の品子夫人や大原孫三郎さん、その他にも、食料を持ってきてくださる方、募金をして下さる方などたくさんの方の助けがあったからこそ、大勢の孤児を救えたのだと思います。

2つ目は、「助けたい、救いたいという気持ちが一番大事だ。」という事です。

助けたい、救いたいという気持ちがあってこそ、良い行いができるのだと思います。十次先生も、孤児を救いたいという強い気持ちがありました。だからこそたくさんの方を救うことができたのです。「良い行いは、気持ちから」という事を学びました。

3年前に起こった東日本大震災も、たくさんの方が苦しみ悲しい思いをしました。そんな時、（自分に出来ることはないかな。）と思った人々が、募金やボランティア活動をして、今も復興の手助けをしています。1人の力はわずかだけど、たくさん集まれば大きな力になるのだと思います。

このように、私は十次先生から大切なことを学びました。私は、これからも、困っている人がいたら、自分に出来る限りの手助けをしていきたいと思っています。



毎日の暮らしの中に

高鍋西中学校 2年 竹山 菜々恵

「そう……。それは、よかったわね。松吉、よろこんでしょう?」

この言葉がのちに30人もの孤児を救う石井十次先生をつくった言葉だと思えます。

この言葉は、十次先生が6つか7つの頃に母に言われた言葉です。秋祭りで縄の帯をしていて仲間外れにされていた松吉に十次先生は自分の新しい帯を渡し、交換したそうです。

母に説明した時に言った一言。そのことに十次先生はとても驚いたそうです。決して裕福とはいえない状況の中で、母はこのような一言を言ったのです。十次先生の母はとても優しく、人の幸せを考えられる人だっただけです。このような母に育てられたから、十次先生も自分の幸せよりも人の幸せを考えられる人に育ったのだと思えます。

私は、この話を知って自分の生活を振り返ってみました。すると自分のことを優先してしまっていることがわかりました。家で母に手伝いを頼まれても、自分の好きなことをしていたら、手伝いをしないことがよくあります。十次先生の母や十次先生だったら、このようなときにも自分のことだけでなく、相手を優先して考えるのだらうと思えます。

十次先生の母や十次先生のように、私も「自分のことよりも周りの人の幸せを考えられる」そんな優しい人になりたいと思えます。



第31回石井十次生誕記念式典 意見発表

宮崎県立高鍋高等学校 2年 甲斐 義巳

「親のない孤児よりも、一層かわいそうなのは心の迷い児、精神の孤児だ」

これは石井十次が生前残した言葉である。「実際に親が存在するか否かではなく、『父性』または『母性』の不在こそが問題である。」という意味である。私たちの生きる現代社会にも当てはまる言葉で、家庭内の児童への虐待や一般社会における未成年者への権利侵害が急速に悪化していくことを、十次は早くから認識していたかのように思われてならない。

さて石井十次といえば、ご存じの通り日本で初めて孤児院を創設し、自らの生涯を孤児救済に捧げた人物である。十次は日本の児童福祉事業の先駆者と言っても過言ではない。私は、高鍋町出身で小学校、中学校と十次について多くのことを学習してきた。高鍋高校でも、地域学習の中に盛り込まれており私が卒業して何年、何十年後もきっとそれはあり続けると思う。私は、十次のような生き方に、憧れを抱きながらも、決して真似できないと思う点が1つある。それは十次が医学の道をあきらめて、孤児救済の生涯を送ったという点である。「あきらめた」という表現はおかしいかもしれないが、それまで医学の道に進むためにも相当の努力を重ねて生きてきたはずである。自分の将来よりも目の前にいる他人の将来に尽力することは想像すらできないほど実際には大きな葛藤があったのではないだろうか。

私は現在、生徒会役員として活動している。学校の様々な行事を企画・運営する大変さや辛さ、充実感は言葉に表すのが非常に難しい。「やってみないとわからない」と感じることが多い。できれば避けて通りたいと思ってもやらなければならないし、自分で回りを見ながら判断して行動しなければならぬこともある。時には生徒に向かっていやなことと言わなければいけない。私は、これまで目立たないように、回りに流され流され地味に生きてきた。高鍋高校で生徒会執行部として活動し始めてから、少しではあるが決断力も行動力も身につけてきた。「ここで意見を言うべきだ!」と思いつつも結局何も言えないということは多々あるが、それでも以前の私であれば「意見を言った方がよい」という考えにもならなかったかもしれない。

今回、このような場で意見発表をできる機会をいただき、本当によかった。石井十次の生涯について改めて勉強して、自分自身と照らし合わせることができた。私は十次ほど「優しい心」も「行動力」もまだ持ち合わせていないが、着実に一步一步前進している。自分のこれまでやってきた事にも自信と誇りを持つことができた。これから進んでいく道に、いつも十次のような「優しい心」、「行動力」を持って生きていきたいと思う。

「鮎は瀬に住む 鳥は樹にやどる 人はなさけの下に住む」

石井十次



The Great Person ~Ishii Juji

Takanabe-Higashi J. H. S.
3rd Grade. Abe Momoka

When he was six or seven years of age, Juji was dressed by his mother in a new kimono with a fine belt for the harvest festival. "Now you look handsome! Why don't you go outside and play?" said his mother. Juji ran over to the shrine, his heart beating with joy. A small boy was sobbing near the gate of the shrine. "What's wrong, Matsukichi?" Juji asked. But he guessed from the way Matsukichi was dressed humbly in a torn kimono with a rope for a belt, that he was being snubbed by his friends. "Stop crying, Matsukichi, I'll give you my belt," said Juji, taking off his belt for Matsukichi. Then he led Matsukichi over to his friends, to join them and play.

In the evening, Juji went home only to be asked by his mother what had become of his belt. Juji told her the truth honestly, though he feared that he might be scolded for what he had done. But his mother gave him a gentle smile, and said. "Is that right? Good for you. Matsukichi must have been very happy." His mother's response inspired Juji to begin his volunteer work.

This is the well known story about Ishii Juji. As you know, he is one of the greatest people from Takanabe. I have often been taught Mr. Ishii's teachings since my childhood. Now I respect him and I'm very proud of him.

There are words Mr. Ishii left: 信— To believe in each other, 愛— To love each other, 和— To live together in harmony'. I always keep them in mind, and I try to do my best to be a useful person for society.

偉大なる 石井十次

高鍋東中学校 3年 阿部 桃佳

石井十次が小学校に入学するころ、十次は秋祭りに素敵な帯に新調した着物を母に着せられていました。「さあ、これできれいになったわ。外で遊んでいっちゃい。」と母親が言いました。十次は胸をはずませて天神さまに走って行きました。すると1人の男の子が鳥居の近くで泣きじゃくっていました。「どうしたんだい？松吉。」十次が尋ねました。すぐに、十次は松吉が縄の帯にみずぼらしい着物を着ているので、みんなにのけものにされていることがわかりました。「泣くんじゃないよ、松吉。ほくの帯をあげるから。」十次は自分と松吉の帯を取り替えました。その後、松吉を連れてみんなと遊びました。

夕方、家に帰ると十次は母に彼のしている帯について尋ねられました。十次はおそろおそろ正直にわけを話しました。母親は優しく微笑みかけながら「そうなの？それは良かったわ。松吉は喜んでいないわね。」と言いました。十次の母のことばは彼が奉仕の仕事につくきっかけになりました。

これは石井十次がよく知られている話です。ご存じの通り、彼は高鍋町出身の偉大なる先人たちの1人です。私は石井十次の教えについて子供の頃から教えられてきました。そのおかげで私は石井十次を尊敬し誇りに思っています。

石井先生の残した言葉があります。信—お互いを信じること。愛—お互いを愛すること、和—協調しながら共に生きること。このことばを私はいつも心にとめ、社会に役立つ人間になると努力しています。



The life of Ishii Juji

Takanabe-Nishi J. H. S.
Hiyanagi Rina

Ishii Juji was born in 1865, in Babanoharu, Takanabe Town, in Miyazaki prefecture. Juji was an ambitious boy and wanted to be a naval officer. So he went to a school in Tokyo called Kogyokusha, but a year later, he fell ill and was not able to fulfill his dream.

When he was eighteen years old, Juji studied medicine and Christianity at Koushu Medical Institute and went back to his hometown during the summer holidays. In his town, he established a school called Babano-haru-asaban school where young villagers could study. During the day, they would work in the fields and then study together at night. Juji was greatly respected by all the villagers.

One day Juji found a boy and a girl dressed in shabby kimonos at the temple. They looked up at Juji with fear and anxiety on their faces. The instant Juji gave rice-balls to them, these children wolfed them down. That night their mother was also at the temple. She said to Juji with fear-filled eyes, "We are living our lives as beggars with no place to stay nor relatives to rely on. Wherever we go, people throw stones at us and make us go away. Sir, we can't keep on living this way. I implore you to take care of this boy." Juji went home His heart was full of sympathy. "Shinako, my dear, can't we do something for them?" Juji said to his wife. She answered in a compassionate tone, "Just one boy would not be too much trouble!" They decided to adopt the boy named Sadaichi and bring him up. More and more people heard about this and Juji was asked to look after many children. Later, he set up "The Orphan Education Association".

I'm proud of Ishii Juji, because he is an outstanding person who came from my town. He is one of the great men who contributed to the progress of the Japanese welfare system. Juji's statue continues to look down warmly on us. The people of Takanabe will never forget his spirit.

石井十次先生の生涯

高鍋西中学校 2年 日 柳 莉 奈

石井十次は、1865年、宮崎県高鍋町馬場原で生まれました。十次は志を高く持った少年で、海軍士官になりたいと考え、攻玉舎という学校に入りました。しかし1年後、彼は重い病気にかかり、夢を果たすことができませんでした。

18才のとき、十次は甲種医学校で医学とキリスト教を学びました。夏休みになると必ずふるさと高鍋に戻りました。そして村の若者たちのために「馬場原朝晩学校」という学校を設立しました。昼間は田畑に出て働き、夜はみんなで勉強をします。十次は村の人々に大変尊敬されました。

ある日、十次は寺にほろをまとった男の子と女の子を見付けました。2人はおどおどとして不安そう目で十次を見上げました。十次がおにぎりを差し出すと、2人は奪い取るようにして、あっという間におにぎりを平らげました。その夜、寺に2人の母親もいました。「わたしたちは、家も身寄りもなく物乞いをして生きています。どこへ行っても人から石を投げ付けられて追い払われてしまいます。このままでは生きていけません。どうか、男の子だけでもあずかってください。」十次は胸いっぱい哀れみの情を満たして家に帰りました。「品子、私たちに何かできないだろうか。」十次は妻品子に相談しました。品子は哀れんでこう答えました。「男の子だけならなんとかなりますよ。」2人はその定一という男の子を引きとり、育てることにしました。人々がこのことを聞いて、たくさんの子どもたちが十次に預けられたのでした。そして、のちに十次は「孤児教育会」を設立したのです。

私は、十次を誇りに思います。同じ高鍋町の人として、そして、日本で福祉の道を開いた一人の偉人として。十次の銅像は、これからもずっと私達を見守ってくれるでしょう。高鍋の人々は十次の精神をいつまでも忘れないでしょう。